
偽りの五角形

なかみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽りの五角形

【Nコード】

N3037L

【作者名】

なかみん

【あらすじ】

私達って親友だよな？ その言葉に、直ぐに頷く四人の親友。でも、本当は……………。

桜舞散る季節。普段なら朗らかな日差しが差し込み、若人達の憩いの場となっている午後の喫茶店。

しかし、今日は生憎の雨。叩きつけるような激しい雨音に混じり、遠くで雷まで鳴っている為、店内の客足も少ない。

「えー、マジで？ ぶっちゃけ、あり得くない？」

「いや、マジだって！ 先輩から直接聞いたんだぜ。学校の裏サイトにも載ってたし、間違いないって」

目の前で交わされる友人達の会話を聞いて、赤坂^{あかさか} 美佳^{みか}は小さくため息を吐いた。

時刻は四時を少し過ぎた頃。赤坂が通う高校から少し離れた所にある、小さな喫茶店。

放課後は、友人達とそこを訪れるのが日課になっている。

「でもさ、普通に考えてあり得ないじゃん？ 私は、あまりパソコンとか詳しくないから、裏サイトの事は知らないけどさ……その先輩は、何でそんな時間に学校にいたのよ？」

「それは、噂が本当かどうか確かめる為だろ？」

高校に入学して、直ぐに出来た四人の友人。

五人掛けの五角形テーブルで、彼女達と毎日顔を合わせている。

「なあ、美佳も聞いたろ……って、美佳？ 聞いている？」

「えっ？ あっ、ごめん。何の話だっけ？」

突然、話を振られて赤坂は我に返る。

慌てて聞き返すと、友人の緑川が呆れたように肩を落とした。

「まったく、すっかりしろよ。ほら、あの話しだよ。先輩が言ってた、夜の校舎に幽霊が出るって噂。美佳も聞いただろ？」

「あ、ああ、アレね。うん、聞いたよ」

正直、かなりどうでもいい話だ。

今、クラスではある噂が流行っている。

午前三時に校舎で幽霊を見た。

下らない。今時、小学校でも流行らないそんな噂に、何を夢中になっっているんだか。

心の中で吐き捨てて、赤坂は隣に座っている白石しらいし 真子まこに目を向ける。

乱れの一切ない、黒色の長い髪。何をするにも堂が入った、優雅な物腰。

緩やかにウェーブした髪が醸し出す気品は、誰の目にも明らかなら程だ。

「あら、どうかしましたか、赤坂さん？ わたくしの顔に、何か付いてますか？」

赤坂が見詰めているのに気付いたのか、白石は高級そうな手鏡をポケットから取り出し、しきりに顔を気にし始める。

「ち、違うよ。白石さんはいつも通り完璧だよ」
「あら、嬉しい事を言ってくれますわね。赤坂さんも、いつも通り口がお上手ですね」

そう。白石はいつも完璧。

服装も言葉使いも、存在に至るまで何もかも完璧。
何でも、父親は有名な会社の社長で、小さい頃から英才教育を受けてきたらしい。

高校に入ったのも、ただの気まぐれで、卒業後は父親の後を継ぐと言っていた。

「……………」

だからこそ、気に入らない。

白石のいつも人を見下すような話し方。

常に人を値踏みするような目が、赤坂は大嫌いだった。

死んでしまえ。

心の底から、そう思う。

いっその事、帰宅途中に通り魔にでも遭って、身体中をズタズタにされてしまえばいい。

死んでしまえ！ 殺されてしまえ！

気紛れに歩いた道で、偶然に通り魔にあつて、無関係な人間に殺される。

ああ、なんて面白いのだろう。

クラスの誰よりも頭が良く、将来は勝ち組になる事が約束されている彼女の人生が終わった理由。

それが たった一つの気紛れ。

滑稽だ。実に、滑稽だ。

明確な理由もなしに、ただの気紛れが招いた死。

白石 真子。いつも気紛れに生きている貴方には、お似合いの死に方だよ。

赤坂は、白石を見詰めて心の中で呟いた。

赤坂の思いなど知る由もなく、白石は隣に座る黒野くろの 梨奈りなに目を向けた。

人形のように整った顔立ち。赤いリボンとツインテールが特徴の美少女。

持ち前の可愛さと天然さで、クラスのムードメーカーになっている。

「んっ？ 何か用かな、真子ちゃん？」

「ワザとらしく小首を傾げて、無垢な瞳でこちらを見詰める黒野。

「な、何でもなくてよ、黒野さん。いつも通り、素敵なお顔ね」

「ふーん、あつ、そう。だったら、こっち見んな。お嬢様口調とか、マジでキモいから」

興味を失ったように呟いて、黒野は目の前のオレンジジュースに手をつけ始める。

「……………ッ!？」

そう。これが彼女の本性だ。

教師や男子の前では、間違っても出す事のない裏の顔。

猫を被っているなんてものじゃない。

普段は天然ぶっているが、白石に対してはこんな感じだ。

「……………」
だからこそ、気に入らない。

クラスでは自分以上に目立っている彼女。

完璧な演技で、クラスの大半を見方につけている黒野が、白石は大嫌いだ。

死んでしまえ。

心の底から、そう思う。

いつその事、お父様に頼んで何処かの海に沈めて貰おうか。

一週間ほど海底に沈めて、それから誰かに発見させればいい。

その可愛い顔が、ふやけて見る影もなくなり、おまけに腐敗でグチャグチャになればいい。

ああ、何て面白いのだろう。

唯一の自慢だった顔が、葬式にも出せないほど醜く変貌する様。考えただけで笑いが込み上げてくる。

黒野 梨奈。もしそうだったなら、わたくしは改めてこう言うって差し上げましょう。

あら、黒野さん。いつも通り、素敵なお顔ね。

白石は、心の中でそう呟いた。

白石の思いなど知る由もなく、黒野は隣に座る緑川みどりかわ 早紀さきに目を向けた。

短く切り揃えられた髪に、少し釣り上った目。

すらり、と長い手足に高い身長。

その男勝りの正確な為か、緑川は男子よりも同姓に人気のある女子だ。

「なあ、黒野。お前は、どう思う？」 幽霊っていると思うか？」

「はあ…………？」 幽霊？」

「そつだよ、幽霊だよ！ 今度、夜中に学校に忍び込んでさ、一緒に幽霊探そつぜ？」

訳の分からない提案に、思わずため息が出そうになる。

「さ、早紀ちゃん？ 危ないから止めようよ。本当に出たら怖いし……」

調子に乗せて、夜の学校に連れ出されるなんて冗談じゃない。

別に本気で怖いわけじゃないが、万が一見つかって、教師からの評価が下がるのは困る。

せっかく、今まで築き上げてきた立場を、こんな女に壊されてたまるものか。

「大丈夫だよ、黒野。危なくなったら、私が絶対に守ってやるから」「いや、でも……もしも、先生に見つかったら」

そういう問題じゃないんだよ、このバカ女。

口から出かかった言葉を飲み込み、黒野は表情が崩れないように努める。

「お守り持つて行くから、大丈夫だって。神様が味方に付いてるんだぜ？ 絶対に見つかる筈がないじゃん」

まるで、当然の如く言い放つ緑川。

黒野はテーブルの下で拳を固く握り、怒りを何とか押し殺す。

本当に、この女は救いようのないくらいバカだ。

何なんだよ？ 何処から湧いてくるんだよ、その自信は？

偶像崇拜だけで、根拠もなくせに、何で言いきれるんだよ。

「……ふざけんなよ」

誰にも聞こえないような声で、俯きながら黒野は囁く。

緑川はいつもそつだ。

他人の都合なんてお構いなしに、勝手な言い分で迷惑を押しつけていく。

だからこそ、気に入らない。

言いたい事をはつきり言つて、常に前向きに生きている緑川も、それに振り回されている周囲の人間も。

自分を偽らずに生きていくせに、どうして皆が連いてくる？
何故、皆に人気がある？

分らない。私には理解できない。

私なんて、本当の自分を見せた途端、誰もが離れていくというの
に……。

死んでしまえ。

心の底から、そう思う。

そんなに神の加護が欲しいなら、いつその事、何かの宗教にでも
騙されて、自爆テロでも実行すればいいのにと思う。

誰かの為、神の意志だと信じ込み、何も疑うことなく死んでいけ
ばいい。

手足が吹き飛び、身体中がバラバラになる瞬間まで、前向きに消
えていけ。

こみ上げる笑みを噛み殺しながら、黒野は心の中でそう呟いた。

黒野の思いなど知る由もなく、緑川が喫茶店のケーキを頬張って
いると、隣の席から声が掛かる。

「ね、ねえ、早紀ちゃん……」

「……何だよ、青井？」

消え入りそうな声で話し掛けてきたのは、青井あおい 静香しずか。

小柄な体格に華奢な手足。雪のように白い肌と、線の細い身体。

見た目通りの内気な性格で、クラスにもあまり溶け込めていない
ように思える。

「今度、学校に忍び込むんでしょ？ それって、私も行っていいか
な？」

「……………」

遠慮がちに尋ねる青井に、緑川は露骨に眉を寄せる。

「別に構わないけど……青井、お前って運動は得意だっけ？」

「えっ？ ううん。私、子供の頃から病弱だから、体育も見学して

るの。でも、どうして？」

「いや、だつてさ。忍び込むには校門の柵を、乗り越えなきゃならないじゃん。お前、ちゃんと越えられるか？」

青井は少し考えた後、静かに首を横に振る。

「はあ……」

口から漏れるため息を隠そうともしない緑川に、青井は気まずそうに目を伏せる。

「ご、ごめんね。でも、私……」

「……………」

青井はそこで言葉を切り、沈黙が二人の間に降りる。

何だ、これは？ これでは、私が青井を仲間外れにしようとする悪者のようじゃないか。

「ちよつと、早紀！ 静香が泣きそうだよ。何か知らないけど、一緒に連れて行ってあげなよ」

「いや、でもさ……」

正面に座る赤坂にそう指摘され、青井の顔を覗き込むと薄っすらと涙が浮かんでいる。

「いいじゃん、別にそれくらい！ 静香が登れなかったら、早紀が押し上げてあげなよ。困った時はお互い様。早紀だって、私にノート借りたでしょ？」

「ま、まあ、そうだけだよ」

面倒見がいい性格の赤坂には、緑川自身も何度も世話になった事もあるの、あまり強く出られない。

実際、赤坂に頼めばノートを写させてくれるだけでなく、勉強で分からない所を丁寧に教えてくれる。

勉強が苦手な自分が、授業に連いて行けているのは、間違いなく赤坂のおかげだ。

「さ、早紀ちゃん……」

おまけに、青井は未練がましくこちらを見詰めてくる。

何だよ……何なんだよ、お前は！？

どうして、私が悪者みたいになってるんだよ？

「ああ……分かったよ」

渋々、緑川がそう吐き捨てる、青井の顔が一瞬で明るくなった。

「あ、ありがとう、早紀ちゃん」

「ふふ、良かったね、静香」

「うん、美佳ちゃんのおかげだよ」

無邪気に笑い合う、赤坂と青井。

そして、青井はこちらにもその笑顔を向けてくる。

その笑顔が、気に入らない。

ウザいし、何よりも気持ちが悪い。

媚びるような笑顔を、私に向けるな。

「ちっ……!!」

舌打ちと共に視線を反らし、緑川は窓から遠くの景色を眺める。

青井の笑顔を見てみると、無性に腹が立ち、感情が爆発しそうになる。

どうして、いつもこうなる？

緑川が何かをしようとすると、絶対に青井が連いて回ってくる。

初めは、色々と世話を焼いてやったが、最近はだんだん面倒になつてきた。

青井は要領の悪さに加えて、物覚えも悪い。

おまけに鈍くさくて、皆の足を引っ張ってばかりだ。

しかも、何かにつけて真っ先に緑川を頼ってくるので、鬱陶しくて仕方がない。

一度、それに耐えかねて思い切り突き放した事もあるが、皆から反発されて仕方なく仲間に加えたのだ。

死んでしまえ。

心の底から、そう思う。

何故、自分が世話を焼いてやらなければならない？

こんな、明らかに構って下さいって顔をしている女の何処がいいのだ？

青井がいる所^{せい}為で、行動も自然に制限されてしまう。
どうして、自分だけ重りを背負って歩かなければならない？
こんな奴、いなくなればいいのに。

いっその事、ハイキングに行こうと声を掛けて、何処かの山奥に置いて帰ろうか。

誰もいない山の中で、私の名前を呼び続けながら朽ち果てる。

ああ、面白い。想像しただけで、楽しくなってくる。

暗い暗い山道を一人で彷徨い歩き、届かない叫びを響かせればいい。

それが、お前にはお似合いの死に方なんだよ。

窓から外の景色を眺めながら、緑川は心の中でそう呟いた。

緑川の思いなど知る由もなく、青井が先ほどの喜びを噛みしめていると、隣で赤坂がため息を吐いた事に気が付いた。

「美佳ちゃん？ どうしたの？」

「えっ？ ううん、何でもなし。静香に相談しても仕方ない事だから。あつ、それよりグラスが空だよ？ 何がいい？ 持ってくるよ。そう言いながら、赤坂は青井のグラスを持って席を立つ。

「あ、美佳ちゃん。それなら、自分で……」

「いいから、いいから。リクエストがないなら、適当に持ってくるよ」

青井の言葉など聞かずに、赤坂はドリンクバーのコーナーへと歩いて行ってしまふ。

残された青井は、唇をきつく結んだ。

赤坂の面倒見の良さは、クラスでも評判だ。

引っ込み思案な青井とは違い、赤坂は誰とでも仲良くなれる。

この四人の輪の中に入れたのだから、赤坂が声を掛けてくれたからだ。

恐らく、自分一人では誰とも話せずに孤立していた事だろう。

その点では、赤坂に感謝している。

確かに感謝しているのだが……。

「はい、オレンジジュースで良かったかな？ まあ、嫌だったら入れ直すから、遠慮なく言ってよ」

優しい声と共に、横から差し出されるグラス。

「あ、ありがとね」

青井は軽く頭を差上げて、オレンジジュースをテーブルの上に置く。

「ふふ、どういたしまして」

嬉しそうに微笑む、赤坂。

そう、皆とこうして話せるようになったのは、間違いなく彼女のおかげ。

もし、それが本当にただの優しさだったなら、青井も嬉しかっただろう。

しかし、青井は気付いてしまった。

青井が困った時に、必ず助けしてくれる彼女の目には、れんびん憐憫の情が混じっている事を。

「……………」

だからこそ、気に入らない。

赤坂の同情するような目が、心底憎い。

青井は知っている。赤坂は世話好きのように見えて、本当は自分より下の者を見て楽しんでるだけの人間だ。

この子は自分よりも下で、可哀相だから助けてあげよう。

そんな気持ちでいるに違いない。

死んでしまえ。

心の底から、そう思う。

いつその事、帰り道で交通事故にでも遭って、植物人間にでもなってしまうばいのに。

他人の世話どころか、目を開ける事すら出来ない。

病院のベッドで他人に世話されて、やがては衰弱して死んでいく。

「ふふ……うふふ」

そんな未来が来たら、何て愉快だろうか。

他人から同情の視線を注がれて、一度も目覚めることなく死んでいく。

もちろん、私も一緒に同情してあげよう。

その死に方こそが、いつも他人を見下してる貴方にお似合いの死に方よ。

目の前に置かれたオレンジジュースを飲みながら、青井は心の中でそう呟いた。

今日も五人は親友で、五角形は完成する。

誰かが誰かを気に入らず、歪な歪な五角形。

誰かの死を願いつつ、誰かに死を願われる。

狂った狂った五角形。

それでも五人は親友で、今日も偽りの笑顔を向け続ける。

ねえ、私達って親友だよな。

その問い掛けに、全員がそろって頷く。

彼女達の顔には、それぞれ意味ありげな微笑が浮かんでいた。

(後書き)

今回はホラーに挑戦してみました。もし、宜しければ他の小説もみてやって下さい。感想とかくれたら、作者は嬉しさのあまりコサックダンスをします(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3037/>

偽りの五角形

2010年10月8日15時05分発行